
アクセルコード

日ノ月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アクセルコード

【Nコード】

N5740Y

【作者名】

日ノ月

【あらすじ】

——八月二十日。

一人の少年が白装束の女に殺された。

その翌日、少年は何事もなかったかの様に病院のベッドで目覚める。

——その身にアクセルコードと呼ばれる異物を宿しながら。

く関ヶ原拓海く（前書き）

この作品はフィクションです。 実在する登場人物、団体、その為と一切関係ありません。

く 関ヶ原拓海く

明日、世界が滅びたとしても今日やる事は変わらない。

昨日が不幸であつても、今日が幸福だったとは限らない。

人生なんてきつとそんなもんだ。

16歳になつても特に大した事件はなかった。

ただ16年も生きてきたんだな、と他人事の様に感じるだけ。

だが、唐突に人生は動き出す。

本人の意志も無視して、少年は戦乱の業火に身を投じていく。

すうと日本刀が関ヶ原拓海の身体を貫いた。

刃が胸から背中に突き出しても拓海は自身が刺されたという実感がわかなかった。

滴り落ちる真紅の液体も、身が震える寒気も、痛みすらも、拓海は他人事の様に感じていた。

（俺、死ぬのかな）

胸の辺り、確実に心臓を貫かれた。

虚ろな眼に写るのは白装束の女。

片膝を地面につけ、白装束の女が、胸に銀色に輝く丸い何かを押し付けてきた。

『ソレ』は胸に溶ける様に入り込んでいく。

（何をしてる？）

されるがままに、かろうじて残る意識で白装束の女を睨む。

拓海の身体に『ソレ』が完全に入ったのを見届けると、白装束の女は霧の中へと消えていた。

刺された筈なのに生きている。

たまたま運が良かったのか、病院のベッドで目覚めた彼に待ち受けていたのは歳の離れた姉の感涙の抱擁だった。

「拓海のばか！お姉ちゃん心配したんだからね！！」

「ごめんなさい」

抱きしめられている事に気恥ずかしさを感じながらも拓海は素直に謝った。

「いいの。でも、良かった。お医者さんの話だつと軽い脳震盪だつて。二、三日も安静にすれば直ぐ退院できるそうよ」

姉の言葉に違和感が走った。

「脳震盪？」

「そうよ。拓海も馬鹿よね。滑って頭を打つなんて。気をつけなさいよ——」

姉の軽口も思案する拓海の耳には入っていない。

（どういう事だ？俺は日本刀で胸を貫かれた筈だ。なのに何で姉さんはソレを言わない？隠してる訳でもなさそうだし）

それに、どうして生きている。

一番の疑問はそこだ。

心臓を貫かれて生きている人間は、先ずこの世にはいない。

拓海も自らの死を確信していた。

それなのに生きている。

ここは生きている事を素直に喜ぶべきか、

（一体——ッ！！）

入院着のはだけた自分の胸を見て、拓海は絶句した。

——ない。

傷痕がない。

白装束の女に刺された胸の刺傷が綺麗さっぱりと消えていた。

まるで日本刀で刺されたことなど、始めから無かったかのように。

（まさか、あれは夢なのか？）

自問自答。

（頭を打って気を失ったから。そうだな。あんな事、ありえないよな）

全てを理解し、少年は頷く。

「どうしたの？もしかして、どこか痛いのか？」

心配症な姉に拓海は苦笑した。

「大丈夫だよ。姉さん」

拓海は、まだ知らない。

けして身に起きた事が夢、幻でない事を。

拓海は、まだ気づかない。

これから起きる戦いの中心が自分であると言う事に。

知らず、気づかないまま、拓海は姉と普段通りの会話を続ける。

その身にアクセル・コードと呼ばれる異物を宿しながら。

予定通り、二日後には退院できた。

「じゃあ姉さん。出張に行ってくるから」

「いつてらしゃい」

関ヶ原姉妹は都内のマンションで二人暮らしである。

両親は数年前に飛行機事故で亡くしている為、歳の離れた姉が拓海の保護者がわりをしてくれていた。

姉は、拓海の生活費を支払い、高校にも通わせた。その事に対して拓海は感謝しても感謝しきれない気持ちを抱いているが、

「朝ご飯はちゃんと食べるのよ。食べ終わったらちゃんと食器を洗って、あと、それから——」

でも、この心配症だけはどうかしてくれないかなと拓海は常々思う。

「大丈夫だから。それよりも新幹線に乗り遅れるよ」

姉は今日から暫く仕事で長期出張する。

「わかってます。それじゃ本当に行って来るからね」

まるで今生の別れの様に涙を浮かべる姉に、拓海は本当に困った笑顔を浮かべた。

「はいはい。わかったから。本当に遅刻するよ」

何時までも出ようとしない姉の背中を強引に押して外に出すと、ついでにキャリーケースも出してあげる。ようやく決心したのかとぼとぼと歩く姉の姿は何処か頼りなく映った。

——ロシア。

「アクセルコードの居場所を掴んだわよ。場所は日本」

「ふん。極東の地か」

——アメリカ。

「おお！ニッポン！メイドカフェ！ワタシ、イキタイです！」

「いや。俺達の目的はアクセルコードを手に入れる事なんだが」

——イギリス。

「エリーゼ。僕達の願いがついに叶う時が来たんだね」

「ああカルロス。手に入れましょう。アクセルコードを」

——フランス。

「主よ。必ず、手に入れてみます。アクセルコードを」

そして、彼らは動き出す。

日本へ

件のアクセルコードの持ち主（本人は気づいていないが）は呑気に一人暮らしを満喫していた。

「ゲームやり放題！！ジャンクフード食べ放題！！これぞ！ビバ・青春！！」

普段、口うるさい姉から色々と制限されていたストレスを開放するように、ゲームをやりまくり、ポテチなどのジャンクフードを食べまくった。

その結果、姉が長期出張に出かけてから、僅か三日あまりで拓海の私生活はだらしないものになっていた。

しかし、当の本人は、これが青春じゃー！！と訳のわからないテンションになっており、抑制する者がいない為に、今日も暴飲暴食を繰り返す。

「自由だ」 自由を満喫してる。
後、一ヶ月程、姉は帰って来ない。おまけに今は夏休み中で学校も休みだ。

——ピンポン、と玄関のチャイムが鳴った。

誰だあー宅配便か？と軽い気持ちでドアを開けた瞬間。

拓海の身体が衝撃で吹き飛ばされた。

ノウバウンドで部屋の反対側に置いてある洋服棚に背中を叩きつけられた。

（……………息、が、……………な、にが、起きた??）

呼吸が上手く出来ない。

突然の来訪者。否、この場合は襲撃者が正しいか、は土足のまま部屋の中に入ってきた。

見ると、白人の大男だ。

背は天井に届く程、大きく。シャツが内側から破れんばかりの肉体をしている。

よく鍛えてある肉体は、格闘家のそれとは違ってみえた。

ましてやアスリートとも違う。

近いのは軍人。それが一番しつくりとくる。

ようやく呼吸を取り戻した拓海は襲撃者を睨みつける。

「誰だ、てめえは！？人様の家に土足で入りやがって！靴を脱げ！靴を！」

外人相手に日本語が通じるのかわからないが、頭に血が昇った拓海にそれを考える余裕はない。

「すまん。日本には慣れていないものでね」

交戦的な口調。しかも日本語だ。

襲撃者の手には携帯電話が握られていた。

「ふん。どうやら間違いないようだな。まさか、こんなひょつろちい奴に『アレ』が埋め込まれているとは」

何を言ってるのか、拓海には理解できなかった。

「何なんだ！！お前——ッ！！」

二度目の衝撃が拓海を襲った。

垂直におろされた水平チョップが首の後ろに叩きこまれたのだ。しかも、やったのは目の前の白人の大男ではない。

もう一人襲撃者はいたのだ。

そいつが、拓海を背後から襲い、意識を奪いさった。

「やりすぎじゃないのか？レヴィ？」

レヴィと呼ばれた少女は、腰まである金色の髪を靡かせ、気を失っている拓海の片腕を持ち上げた。

「コレ……運ぶの手伝って」

無表情に見える、その表情は素なのか、それともわざとそう繕っているのか、白人の大男ジェフリー「ハウマン」にはわからなかった。

「了解だ。お姫さま」

西洋のお姫様の様な白い洋服を着たレヴィ・ノウエルは退屈で死にそうだった。

退屈しのぎに、一人ジエングをしてみるが、直ぐに飽きてしまう。そもそもジエングは大勢で遊ぶから楽しいもので、一人で遊ぶジエングは、ただの自己記録の挑戦となっていた。

（ひまー！退屈ー！）

ぶらぶらと両足を動かしてみたり、可愛くデフォルメされた熊のぬいぐるみに抱きついてみたりするが、この退屈から逃れる事は出来ないみたいだ。

（あっちはどうなったかな？——見に行ったら怒られるかな？）

眼が覚めると、拓海は、まるで実験室の様な白い部屋に閉じ込められていた。

ドアや壁をドンドン叩くが手が痛くなるだけで意味はなかった。拉致られた。

犯人はわかっている。

自宅に襲撃してきた二人組だ。

一人は白人の大男。

もう一人の襲撃者は正体不明だ。

そもそも彼らは何の理由があつて自分を拐ったのかさえもわからなかった。

こう言つては何だが、関ヶ原拓海と言う人間は平凡な高校一年生である。

特に秀でた能力もなく。

大勢の中の一人に埋もれてしまう程の存在価値しかない男だ。

家柄も裕福とは言えず、平凡な家庭。

とうぜん身代金なんかも要求したところで払える額はたかが知れている。

では、何故か？

それは彼の体内にある『モノ』が、深く関係しているのだが、拓海本人が、その事に気づいていないので、自分が拉致られた理由は彼には謎のままだ。

（しかし。何もないな。昔の人体実験なんか、こんな感じなのかな）

テレビで観た映画のワンシーンを思い出しながら、拓海は部屋の中央をうろちよろし始めた。

部屋の広さは代々四畳半ぐらいで、外界との出口はその扉のみ。他に窓などはなく。出るにはその扉しかないのだが、案の定、鍵がかかっている。

「正攻法での脱出は無理となると……………」拓海は上を見上げた。少し高い場所に通気口が見えた。

「やっぱ、あそこしかないか」

だが、どうやって脱出する。通気口は少し高い場所にあるので、背伸びしたところで、とどきそうにない。

そこで、閃いた。

身につけている服をロープの様にして引っ掛ければ、とどくんじやないか、と。

拓海は服とズボンを脱ぎ、トランクス一丁になると、それらを結び始めた。先には重りとなる携帯電話を結ぶ。

「よし。いい感じだ」

くるくるとカウボーイの様に即席のロープを回し、通気口めがけて投げれる。が、あと一步のところだとどかない。（あれ？長さが足りなかったか。長さが足りないなら下着も使うか、誰もいないし問題ないだろ）

あまり深くは考えず、唯一履いているトランクスを脱ごうとした時……………部屋の扉が開いた。

退屈しのぎに、関ヶ原拓海を監禁した部屋にやってきたレヴィ
ノウエルは硬直した。

部屋に変態がいる。

身につけている衣服を全て脱ぎ捨て、今まさに最後の砦である下
着^{ソックス}を脱ごうとしている変態と眼が合った。

二人の間に気まずい沈黙が流れる。

「あはは。初めまして、関ヶ原拓海です」

何を、とち狂ったのか拓海は自己紹介を始めた。

「へ、変態！」

「え、と、君は？」 変態は、下着を脱ごうとしている体勢のま
ま話しを続けようとしていた。

「いいから服を着て！話すのはそれから！」

レヴィは、ぷいっと顔を拓海から反らした。

その顔は彼女しては珍しく羞恥に赤く染まっていた。

「おい！話しが——」

部屋にやってきたジェフリー「ホウマンは、この状況を見て、

「何をしてるんだ、貴様は」 冷静に、そう切り出した。

「だああー！！！！てめえは——！！」

「こつちを向くな！変態——！！」

「もう最低——！！」

——十分後。

服を着て、ようやく落ち着きを取り戻した関ヶ原拓海の頬は赤く腫れていた。よくみたら彼の頬には人の手の平の跡がくつきりと赤く残っており、もっと詳しく言ったらレヴィの手形が残っていた。

「それでは本題に入ろうか」

話し始めたのは白人の大男ジェフリーだ。

腕を組み、鋭い眼光を拓海に向けている。

目の前にいる二人がまともな人間には見えない。突然、人を襲い。拉致するような連中だ。

「私の名前はジェフリー」ホウマン」

ジェフリーは隣にいる西洋の姫様が着ているような洋服を着た少女に視線を向けた。

「レヴィ」ノウエル」

レヴィは避ける様に拓海との距離を空けていた。

「我々が貴様をここに連れてきたのは、貴様の身体にある『モノ』を守る為だ」

「『ソレ』を狙って、世界中の能力者達が、キミの命を狙いに来る。わたし達はキミを守る為に派遣された」

能力者？モノ？二人の言葉の意味が一つも理解できない。

理解が追いつかないまま二人は話しを続ける。

「あの女が、どうして一般人であるキミに『ソレ』を託したのかは知らないわ。でも『ソレ』がキミの身体の中に有る限り、可哀想だけど、キミは狙われ続けるの」

「ちよつとストップ!!」

一辺に訳の分からない話しをされて、拓海の頭の中はパンクしそうになっていた。

「先から、お前らは何の話をしてんだ？『能力者』、『ソレ』って何の話だ!？」

すると、レヴィとジェフリーの二人は互いに顔を見合わせた。
そして、レヴィが代表して彼の質問に答える。

「キミの体内にあるもの。それは、わたし達『能力者』の力を最大限にまで加速させるチートアイテム。名称は『アクセル・コード』。世界中の能力者が喉から手が出る程に欲しいものよ」

「アクセルコード？」

「そうだ。貴様は、あの女に殺され、体内にアクセルコードを埋め込まれた」

「殺された……？なにを言って……」

拓海は思い出す。

白装束の女に会った日の事を。

もしも、あれが夢ではないとしたら。

もしも、あれが現実だつとしたら。

「でも！おかしいだろ！だったら俺の胸に傷があつていいはずだ
！！」

拓海は、シャツの裾を捲りあげ、傷跡ひとつ無い胸を見せる。
それが証拠だつと言わんばかりに、だが、それをジェフリーは一蹴する。

「自分の胸に手をあててみる」

言われた通りに、自分の胸に手をあて、拓海は絶句した。

伝わらない。

そこから伝わるべきはずの音が――。

心臓が動いてない。

代わりに聴こえるのは不規則なモーターが回転する音。まるで心臓の代用品と言わんばかりに回転している。

「……………なん、だ……………これ？……………何だよ！！これ！！」

拓海は叫んだ。

「だから言っただでしょ。関ヶ原拓海という人間は既に死んでいる、と」

少女は無関心に、残酷な真実のみを告げる。

ふざけるな、と拓海は思った。

白装束の女に会った日の事は全て現実で。

八月二十日の日に関ヶ原拓海という人間は死亡していると言う話だ。

なら、ここにいる関ヶ原拓海は何だ？

命を奪われ、アクセルコードと呼ばれる訳のわからないモノを体内に埋め込まれ、ソイツのおかげで生きている。

それではまるで、人形じゃないか。

関ヶ原拓海という本体に、アクセルコードというエンジンを積みこむ。

エンジンがあるから車が動く様に。

アクセルコードがあるから関ヶ原拓海は動いている。

今の拓海の生きる意味とは一体？

きつと悩んだところで直ぐに答えは出ないだろう。

目の前二人が正しい答えを持つてゐるはずがない。

仮に正しい答えを導き出してくれたとしても、それが拓海にとつ

て正解とは限らないのだから。

「一つ、質問していいか？」

「なんだ？」

ジェフリーは腕組みを解いた。どうやら真剣に話を聞いてくれるみたいだ。

「あんたらも、その能力者つてやつなのか？俺を拉致したのも俺からアクセルコードを奪う為なのか？」

「違う。我々の任務はアクセルコードの保護と管理だ。アクセルコードの持ち主の命を奪えとまでは命令にはない」

そのぶつきらばうな言い方に、少しだけ拓海に笑顔が戻った。

「なら、今はまだ敵じゃないって事でいいんだよな」

「うッ！……ふん。いいか！忘れるなよ。俺が貴様を守るのは任務の為だ！」

ジェフリーが何で怒つてゐるのか、拓海にはわからなかった。

「……………これから世界中の能力者がキミを狙いに来る。ならばく、わたし達が対処するけど、キミも十分に気をつけて」

淡々と無表情の少女は言った。

「最後にひとつだけ質問」

「何だ？」

「なに？」

「俺を襲った理由は？」

「「ノリだ（よ）」」

よし、と迷う事なく関ヶ原拓海は、能力者二人に襲いかかった。

コールドレッド(前書き)

これはフィクションです。

コールドレッド

「これから二十四時間体制で貴様の警護にあたる。どこか出かける時はこの番号に連絡しろ」

「はいはい」

「いい。少しでもおかしいな気配を感じたら、わたし達に連絡して」
「わかってるって」

と、ここまですが昨日の出来事だ。

「終わった……………。俺の夏休みが」

今日は九月一日。二学期が始まる日で、拓海は既に自分のクラスの自分の席に座っていた。

「くそ！夏休みの最後まで俺を監禁しやがって」

能力者の説明だとかで、貴重な夏休みを潰してしまった。

おまけにずっと遊んでいたのも、夏休みの宿題は手付かず。お説教コース確定である。

そんなこんなで自分の席に座る拓海は憂鬱な気分だった。

それを知ってか知らずか、クラスメイトの比較的大人しい女子が心配して声をかけてくれた。

「関ヶ原君。大丈夫？」

「ああ、今川か」

視線だけで今川晴香を見た。縁なしの丸い眼鏡をかけた文学少女は、何時も抱く様に文庫本を持っている。

「なんか元気ないみたいだけど、どうしたの？」

「いやさ。夏休み中に色々あってな。簡単に話をまとめるとだな。夏休みの宿題を忘れたのさ……………」

どこか遠くを見つめる眼で、拓海は窓の外を眺めた。

あはは、と今川は苦笑いした。

しかし、周りの反応は彼女と違っていた。

「マジで！？拓海も夏休みの宿題を忘れたのか！」

「うわぁー助かったー拓海が宿題やってきたらどうしようかと思っ
たよ」

「っていうか、他に夏休みの宿題をやってない奴いるか？」

ほぼクラスの半分の奴らが手を上げた。ある意味凄いクラスだ。

だが、皆、どこか誇らしそうな顔をしている。

拓海は胸が熱くなるのを感じずにはいられなかった。

「お前ら……………」

涙が流れるのをぐっと堪えた。

「へへ。何、泣いてんだよ拓海」

そう言う彼の目にも薄ら涙が浮かんでいた。

「らしくないぜ」

そう言っ、拓海の肩に腕を回す奴。

「泣くのは後でしろよ」 拓海の肩に手を置く奴。

彼らは知っていた。

「おーし。夏休みの宿題忘れた奴ら前に出て来い。一発ずつシバいてやるから」

——これから来る、地獄を。

教室内に、あり得ない轟音が響いた。

担任教諭―河瀬がやった事は実にシンプルだ。

生徒、一人、一人を自分の前に立たせ、鉄拳制裁を喰らわせる。

だが、その破壊力は並大抵じゃない。

日頃の肉体トレーニングで極限まで鍛え上げた自慢の肉体美から打ち出される一撃は、まさに一撃必殺。

廊下にまで吹き飛ばされた生徒は、その場でびくりとも動かない。さながら真つ白に燃え尽きたボクサーのようだ。

しかも、一人一人順番にやるので、待たされてる者達はより一層恐怖が増してる。

（ひいひい！俺の番が来ちゃった）

順番が来た以上は仕方ない。男らしく、ここは潔く諦めて罰を受けよう。

そう決心した拓海は、一步前に出ると、歯を食い縛った。びゅっと大気を切り裂く音が聴こえた。ゆっくりと河瀬の拳が自分に迫ってくるのが右目の端で見えた。

（——見える！？奴の拳が！）

反射的に上半身を拳が避けられる程度に反らした。

（やった……。よけ——）

次の瞬間、真正面から拳が見えた。

「よけるな、馬鹿」

バコーン、と笑えるぐらい、拓海の身体は、机を巻き込みながら吹き飛ばされた。

「河瀬先生！転入生連れてきました——って！何、この殺人現場は！？」

教室内の惨劇を見て副担の小泉は、あたふたと慌て出した。だが、拓海の視線はそこじゃない。

その隣——

「レヴィー！？」

「おはよ」

女子の制服を着たレヴィー・ノウエルは確かにそこにいた。

腰まで伸びた髪は白銀色に輝き、肌は新雪の雪のように白く、無表情だ。

間違いない、あそこにいるのはレヴィーだ。

拓海は斜め前に座るレヴィーの横顔を見つめた。

二十四時間体制で自分を守ると言ってたのは覚えてるが、まさか同じクラスに転入して来るとは驚きだ。

「おい。拓海」

後ろの席の奴に話しかけられ、拓海は上半身だけを捻るようにつして振り返った。

「んだよ？麻生」

麻生と呼ばれた少年は、にひひと人懐こい笑みを浮かべていた。
「レヴィちゃん。めっちゃ可愛くね？」

「なんだ……そんな事かよ」

「おいおい。そんな事はないだろ？ 銀髪めっちゃハンパねえ。彼氏いるのかな？ なあなあ」

「うつせーな！ 知るか。なんなら本人に直接聞いて来いよな」

「そんな事したら嫌われるかもしれないだろー」

「うわーめんどくせーめんどくせーいよ、この人！」

「ならオレが聞いてやる」

突然、隣の席の大男が話しに割って入ってきた。

「穴戸。聞いてたのかよ」

「お前たちの話は、オレ様の耳によく入る。いいからオレ様に任せろ」

自身たつぷりな穴戸は前の席に座るレヴィの肩を軽く叩いた。

「なに？ いま授業中」

レヴィは後ろを振り返らずに聞いた。

「すまない。だが、どうしてもあいつらがキミに聞きたい事があるらしい」

ここで初めて、レヴィは後ろを振り返った。

拓海とその後ろの席のおかつば頭の男の子が愛想笑いを浮かべていた。

彼女は、ん？ と小首を可愛らしく傾けた。

「キミは処女か？」 間違いなく、レヴィは固まった。

そして、

（なに聞いてんだーッ！？ あのアホおおおおおおおおお
おおー！！）

拓海と麻生の心の声は偶然にも全く同じだった。

失礼極まりない質問を平気でやってのける、穴戸はある意味凄い奴だっと思心せずにはいられない。

「で、どうなんだ？」

だが、彼はやりすぎた。

レヴィは人間の眼では計り知れない速さで、裏拳を容赦なく穴戸の顔面にいれた。

鼻から血飛沫を巻きながら、穴戸はずでんと天井を仰ぎ見た。

（穴戸ッ！！）

レヴィは斜め後ろに座る二人に、身も心も凍るような冷たい視線を向けた。

その眼は暗にこう語っている。

——覚えていろ、と。

その瞬間、二人の男達は決意した。

この授業が終わったら、素早く教室を後にしよう、と。

拓海が通う高校の正門に一台の外国車が停まっていた。
窓から双眼鏡で拓海の教室を覗き見てるジェフリーは深いため息をついた。

（何をしてるんだ——あいつらは）

ジェフリーの片方の耳にはイヤホンがかけられており、拓海の携帯に仕掛けておいた盗聴器から音声を聞き取っていた。ジェフリーが拓海の監視と盗聴するのは、敵の襲撃に備えて素早く行動する為だ。

けして彼に他人のプライベートを覗き見る趣味があるわけでもない。

これは仕事だから仕方のない事だつと自分に言い聞かせ、ジェフリーは仕事を続ける。

だが、そんな言い訳は日本の警察官には関係のない話だ。とんとん、と窓を叩く音が聞こえた。見ると二人の警察官が繕った笑みを浮かべていた。

日本人特有の愛想笑いだつとジェフリーは認識している。

「何か様ですか？」

なるべく穏やかに済まそうと、ジェフリーは精一杯の笑みを浮かべた。

「ここで何をしてるのかな？」

何を、て関ヶ原拓海の監視と盗聴だが、

（それを正直に話したら、普通に不味いよな）

やや考えて、ジェフリーは答えた。

「娘を待ってるんです」

「はい。嘘つかないで」

（見破れたあ！？）

「どうみても貴方、高校生のお子さんがいる様には見えないよね？その双眼鏡で何を見てたのかな？」

「いや……これは」

しどろもどろになるジェフリーを怪しいと確信したのか、二人の警察官は更に追い討ちをかける。

「貴方、女子高生好きなの？他人の趣味にとやかく言うつもりは

ないけど、ダメだよ覗きなんて」

やっぱりいい。ジェフリーはどうにか上手い言い訳を考えようと、脳をフル回転させた。

（レヴィー！！レヴィー！！）

彼は心の中で、少女を呼んだ。

（なに？）

数秒もしない内に、脳に直接語りかける様に少女の声が聞こえてきた。

能力者同士が使えるテレパスだ。

（コールド・レッドだ！！レヴィ、すまないがこちらに来てくれ）

（だめ。今はそっちにいけない。こっちも、レッドだから）

（何か動きがあったのか！？）

（ええ——馬鹿三人を血まみれ《レッド》にしてやったところよ）

（それ違うーッ！！）

どうやらあっちもこっちも緊急事態のようだ。

敵、現る。（前書き）

この物語はフィクションです。

敵、現る。

狭い部屋だ。一つしかない蛍光灯が部屋を薄暗く灯している。真ん中には机と、パイプ椅子が二つ置いてあるだけの質素な部屋。椅子には大男が一人、ぶっきらぼうな顔で座っている。

「なぜ、あんな真似を？」

大男の横に立つスーツ姿に眼鏡をかけた優男は、そっとその肩に手を置いた。

「すいません！！つい出来心で！！」

優男の優しい声音に大男は自らの過ちを悔い、泣き崩れ――

「そんな訳あるかア！！」

――なかった。

白人の大男、ジェフリー。ハウマンは立ち上がると、横にいた優男――下川愛彦に詰め寄った。

「一体！何時まで俺を拘束しておくつもりだ！愛彦！！」

「落ち着いてよね、ジェフリー。いろいろと手続きがあつて大変なんだから」

まあまあ、と下川は宥める。

「ふん。だったら早く手続きをすませろ。俺は、今忙しいんだ」
「ふん」

下川は檻のついた窓から警察署に近づいて来る一組の男女を見て

いた。

一人は銀髪に目立つ少女。

もう一人の見た目地味な少年の頭には包帯が巻かれていた。怪我でもしたのだろうか。

何やら、二人は言い荒らそっているようだ。

警察署の前にやってきた関ヶ原拓海の頭には包帯がぐるぐる巻きにされていた。

「だいたい女の子に対して、あの発言は失礼だよ」

「だから！俺が言わせたわけじゃねえーよ。穴戸が勝手に暴走しただけだ」

「ふん。どうだか」

ぷいっと頬を脹らませ、そっぽを向くレヴィを、場違いだっと思えど拓海は見惚れてしまっていた。

「なに見てるの？」

「あ、えーっと何でもない」

「……………えっち」

「何でだよー！」

「だって、眼が変態っばい」

警察署からスーツ姿に眼鏡をかけた優男と一緒に出て来たジェフリーに開口一番に拓海は言った。

「変態はアイツだろ！」

「誰がだッ！！」

「——ッてえな!! 覗き魔野郎!」

「貴様——ッ! どうやら死にたいようだな」 額にぴくぴくと青筋を浮かべたジェフリーは、これからアナタをボコしますようと手をボキボキと鳴らした。

「落ち着いてジェフリー。そんな事したら警察署に逆戻りだよ」眼鏡の優男が宥めると、ジェフリーは肩を大きく揺らし、深呼吸をした。

「君が関ヶ原拓海君かい?」

「えーっと、どちら様ですか?」

「僕の名前は下川愛彦。彼らと同類だよ」

「つまり、そっち側の人間」

早い話しが能力者。

「うん。僕は君の護衛役じゃないけど、君の助けにはなるつもりだ。困った事があつたら遠慮なく相談しにおいで」

下川は、優しく微笑んだ。

「ありがとうございます」

「意外に素直で良い子じゃないか。ジェフリー」
そう言って、下川は眼鏡の奥の双眸を細めた。

前を歩くジェフリーとレヴィと、その後ろを少し離れて歩く拓海は、夜の帰り道を歩いている。

「——ねえ拓海!」

若干強い口調でレヴィはぼーっと後ろを歩く拓海に声をかけた。

「ああ、どうしたレヴィ?」

ようやく自分が話しかけられていた事に気づき、拓海は意識を二人に向けた。

レヴィとジェフリーは肩を竦めた。

「先からどうしたの？ぼっーとしちゃって」

「んん。ああごめん」

話しが右耳から左耳に流れていくように、拓海はどこか上の空だ。
「何か気になる事でもあったの？」

レヴィは心配そうな顔で拓海を見つめた。

「先の下川って奴が気になって」

それに反応したのはジェフリーだ。

「愛彦がどうかしたのか？」

愛彦、下川の下の名前か。名字ではなく名前で呼んでいると言う事はジェフリーと下川は親密な仲なのか、と勝手に解釈をし、拓海は話を続けた。

「話してるとき、何か違和感を感じたんだ」

「違和感？」

「ああ。上手く説明できないけど。あの人、俺と話してないようなんだ」

拓海の言ってる意味が分からず、二人は首を傾げた。

「だから上手く説明できないって言っただろ」

拓海は苦笑した。

「なんつーかさ。目の前の人間と話してる感じがしないんだよ。

電話で話してるみたいなのが一番しっくりくるかな」

目の前の人間と話してるのに、その相手と話してない。

拓海は下川に妙な距離感を感じていた。

「初めて会う人間なんだから仕方ないんじゃない？」

レヴィが最もらしい事を言うと、拓海は照れたように頬を掻いた。

「そうかもな」

「ふん。何を真剣に考えてると思えば、そんなくだらない事か」

ジェフリーは腕を組んで言った。

「そうだな」

そう言いつつも、胸の奥がざわついて仕方がなかった。

——その時、拓海は気づいた。レヴィとジェフリーの顔つきが変わっている事に。

「拓海。私達から離れないで」

その言葉の意味は、すぐにわかった。

十二月の寒空の下、青年は薔薇の花束を持ち、浮かれ気分だった。

「やっぱ。もうこんな時間か」

時計の針を確認する。

「彼女、怒ってないかな」

街はクリスマスのイルミネーションで飾られ、恋人達が寄り添いながら、駅前の巨大なクリスマスツリーを見上げていた。

その光景を微笑ましく思いながら、ダッフルコートのポケットに手を入れ、小さな箱を取り出した。

開くと、中にはダイヤの指輪が入っていた。

今日、青年は一つの決着をつけにきた。付き合ってる彼女に告白する、と。

何度も告白の言葉を練習した。

この日の為に、いつもの倍以上働き、指輪も購入した。
付き合って三年。もうそろそろはつきりさせた方がいい時期だ。
自身がある訳ではないが、彼女も二つ返事で了承してくれるだろ
う。

早く彼女に会いたい。

会って、気持ちを伝えたい。

彼女が住むマンションの部屋の前に来た。

青年は、ピンポンとチャイムを押した。

だが、反応はない。

もう一度、チャイムを押す。 またしても反応がない。

静まり返ったマンションのフロアで、青年が鳴らしたチャイムの
音だけが響く。

「もしかして寝てんのかな？」

ドアに手をかけると、驚いた事に開いた。

「あれ？鍵がかかってない」

嫌な予感がした。 ゆっくりとドアを開け、顔だけを部屋の中に入
れた。

部屋は不気味に静まり返っていた。 ますます心配になった青年は
悪いと思いつつも部屋の中へと入っていた。

そして、青年は見てしまった。

愛する人が首を吊ってる姿を。

青年は力なく、その場にへたり込んだ。

かさつと指が何かに触れた。それは、一枚の紙切れだった。その紙切れには、彼女の字で、たった一言だけ書かれていた。
——ごめんなさい、と。

青年は全てを悟った。彼女は自分の意思で首を吊り、自らの命を絶ったのだと。

「なんだよ……それ」

青年は、持っていた薔薇の力なく花束を投げた。

花束は彼女の脚に当たり、花弁を散らしながら落ちた。投げた拍子で、ポケットから小さな箱が零れ落ちた。

彼女にあげる筈だった指輪。

だが、もうそれは一生叶わなくなった。

「…………ふざけるなよ」

その声に答えてくれる者はおらず、青年の声だけが虚しく部屋の中に響いた。

曲がり角から現れたのは、優しそうな顔をした老婆だった。腰は曲がっており、その手には似つかわしくないものが握られていた。——ナイフ。

「おいおいマジかよ」

額から冷や汗を垂らし、拓海は後退りした。

老婆は頭を前後左右に揺らしながら、老婆とは思えない機敏な速さで迫って来た。

「うおおー！」

老婆は真っ直ぐ拓海の胸にナイフを突き出した。

「危なっ！」

間一髪。刺される前に拓海は身体を横にずらして回避した。

こつん、と小石に躓き、老婆は前のめりに転んだ。

そして最悪の事に、転んだ拍子に持っていたナイフが自らの喉に突き刺さってしまった。

「やっちまったあああああああああああー！」

いくら正当防衛と言えど、一人ひとり殺してしまった拓海は頭を抱え、絶叫した。

「グッジョブだ。まさかお前がお年寄りも躊躇わずに殺れる外道だつとは思わなかったぞ」

ほんと、拓海の肩に手を置き、物凄く良い笑顔でジェフリーは親指を立てて魅せた。

「違う違う。グッジョブじゃない！」

拓海は涙目で、ふるふると顔を小刻みに振り、正当さを訴える。

「やだよ！俺、この年で人殺しいい……………なんじゃあ！ありやあ！？」

もぞつと、老婆は何事もなかった様に立ち上がった。

先と同じ様に優しそうな顔で、頭を前後左右に振っている。

違う点と言えば、ナイフが喉に突き刺さったままだ。しかも、その刺さったナイフから血が一滴も出てない。

「人間じゃない……………みたいだね」

レヴィの言葉に拓海は耳を傾けた。

「――傀儡」

その言葉に反応したのはジェフリーだ。

彼は苛立ち気に舌打ちをすると、老婆の喉に突き刺さったナイフを握り、そのまま一気に下に振り降ろした。

左右真つ二つに引き裂かれた老婆の体内には臓器や骨といったものはなく、例えるならマネキンの断面図の様な感じがした。

「クソたれ」

ジェフリーは、吐き捨てる様に言った

彼は知っていた。この傀儡使いの正体を。

「どうやら貴様の勘は正しかった様だな」

誰とは聞かずともわかった。

来た道を駆け戻るジェフリーの後ろ姿を見れば一目瞭然だ。

傀儡使い（前書き）

これフィクションです

傀儡使い

ジェフリーの後を追いかけて、拓海はレヴィに質問した。

「なあ！傀儡使いの能力者って、どのくらい強いんだ！？」

「能力者本人は、そんなに強くないよ。でも厄介なのは操ってる傀儡の方だね」

走りながらレヴィが説明する。

「前にも話したけど、私達の能力は精神力が大きく影響してるの！」

監禁された時に、拓海は能力者について一通り説明を受けていた。
一つ、能力者の能力は無制限ではない事。

二つ、能力には精神力が大きく影響する事。

三つ、能力者は一つしか能力が使えない事。

「傀儡は、いくら壊れても時間が立てば復活するの。何度でも」

「ならどうすりゃいいんだ！」

「能力者本人を倒すのよ」

「なら楽勝じゃねえか」

あの青びょうたん相手に筋肉ムキムキ軍人系のジェフリーが負けるイメージが浮かばない。

「ううん。たぶん難しいと思う」

だが、レヴィはそれを否定した。

「どうして！？」

「恐らく下川は、もう警察署にはいないはずだよ！どこかに隠れて傀儡を操ってるはずだから。ジェフリーの能力は強力だけど、隠れてる敵には効果がないの」

そう言うと、レヴィは急に立ち止まった。

「だから私達の役目は能力者本人を見つけて倒す事……」

「つまり……ジェフリーを囷につかう、と」レヴィはこくりと

頷いた。

仲間を囫に使うのは気が引けるが、状況が状況なだけに仕方ない。「でも、見つけるつつてもな。奴がどこに隠れてるのかわかんねえんだろ?」

なら探し様がないような気がする。

都心から少し離れて居るが、この街にもそれなりに公共ビルやマンションが建っている。

隠れようと思えばどこにでも隠れられる。

「地道に足で探すしかないってか?」

この広い街から、たった一人の、しかも隠れてる奴を見つけるのは難しい気もするが。

「大丈夫。上から探すから」

まるで祈る様にレヴィは胸の前に手を置いた。

すると、彼女の足元が淡く光だし、粒子が彼女の背中に集まり始めた。

粒子は形作り、巨大な光の羽根がレヴィの背中に現れた。

「拓海は、ここで待てて」

レヴィは光の羽根を羽ばたかせ、上空へ飛び上がった。

上空1500メートルまで飛翔したレヴィは辺りを見渡した。

(恐らく、傀儡使いの能力範囲はそんなに広くない)

傀儡使いは人形を自由自在に操る能力だ。操る人形の姿が見えなければ能力は発揮できない。

(なら、近くにいます。この辺り一帯と私達を見張れる場所)レヴィは一つの建物に目を向けた。

その建物はこの辺り一帯の建物よりも頭一つ飛び出していた。

その屋上には誰かがいた。

そいつは双眼鏡で下界の様子を見ているようだ。

——レヴィは、迷わず突撃した。

時速100キロの速さで、飛び蹴りをぶちかます。

しかし、別の人影がレヴィの前に現れた。

岩の様なごつごつした身体がレヴィの飛び蹴りを跳ね返した。
ぎりつとレヴィは奥歯を噛みしめ、邪魔者を睨み付けた。

そいつは、レヴィよりも三倍以上ある巨大な人間だ。まるで神話に出てくる巨人のようだ。

——違う、人形か。

その証拠に巨人の背後に眼鏡を光らせた優男がいた。

「下川愛彦……」

レヴィは呟いた。

「驚いたな。もうこんなに早く僕を見つけるなんて」

「貴方を倒せば、全てが解決する」

「確かに僕を倒すのは、造作ないだろうね。でも——」
下川の指がぐいっと動いた。

「先ずは、こいつを倒してからにしておうかつ！」

下川が叫ぶと同時に、巨人が巨大な両手を合わせハンマーの様に振り降ろした。それを、レヴィは羽根を前に羽ばたかせ、その勢い

で後ろに下がって避ける。

「あんまり私を舐めないでくれる」

一方、その頃――

警察署に戻る途中にある寂れた公園でジェフリーは足止めを食っていた。

老若男女、年齢も、性別も、ばらばらの人形達が、ジェフリーを囲んだまま動かないでいた。 ナイフ、包丁、鋏、カッター、その手に持つ凶器もばらばらだ。

公園にはブランコや滑り台といった定番の遊具は置かれておらず、あるのはベンチと鉄棒が三つ程置かれてるだけだ。

そのベンチには眼鏡をかけた優男が優雅に座っていた。

ジェフリーは自分を囲む人形達には目を向けず、ベンチに座る優男だけを睨み付けた。

「愛彦……」

もう一人の下川愛彦は微笑んだ。

「ジェフリー……。すまないね。君を殺すのは哀しい事だけだ。……」。仕方ないがね、彼女の為だから」

下川は、眼鏡の奥の双眸を細めた。

それを合図に、人形達がじりじりと獲物に近づいて行く。

「ふん。俺も舐められたものだ……」

「殺れ」

下川の冷酷な一言に、人形達は一斉に飛び出した。

襲いかかってきた人形達に対して、ジェフリーが行った行動は、大地を踏みつける事だった。普通の人間から見たら、その行為に何の意味もないと思うだろう。だが、違う。ジェフリーを中心点に波紋が広がり、

「吹き飛ばす」

——全方向に解き放たれた衝撃波が、人形達をまとめて吹き飛ばす。人形達は散り散りに吹き飛ばされ、壁や遊具に身体を打ちつけられた。

その内の一体。学ランを来た男子高校生の人形の膝が、全く反応出来ていない下川の顔面に激突した。

「——なッ！」

ジェフリーは驚愕した。

ないのだ。中身と言つべき、頭蓋や筋肉繊維、血管や眼球、脳にいたるまで、そこに有るべき筈のものが無いのだ。

「ちッ！こいつも傀儡か！！」

同時刻、レヴィも状況に困惑していた。彼女の足元には二人の人の形が胴体から真っ二つになって倒れている。

一体は巨人の人形。

そして、もう一人は下川愛彦の姿形をした人形。

（どういう事……？下川はここにはいない？なら一体どこから人形達を操ってるって言うの……）

人形を操るには、人形が見える範囲に必ずいる筈だ。だから、レヴィはこの場所を見つけ、下川と対峙した。

結局、その下川も偽者だった訳だが。

（本人は必ず近くにいる筈）

しかし、その考え方自体が間違っているとしたらどうだろう。そもそも傀儡使いが見える範囲でないと、人形を操れないと言うのはレヴィの憶測にすぎない。

下川本人がそれを言った訳でもなく。

傀儡使い「見えないと人形を操れない、とレヴィが勝手に思い込んでるだけで、本当は見えていなくても人形を操れるとしたら？

そうなると話は別だ。

（どこにいる……）

だが、傀儡使いが近くにいると思い込んでいるレヴィには、それに気づく事はない。

と、レヴィのポケットが震えた。

『レヴィ！！』

レヴィはポケットから携帯を取り出した。番号はジェフリーからだ。

「ジェフリー！そっちはどうなったの！？」

テレパスで直接頭の中で会話すれば言いと思うが、アレはかなりの精神力を使う為、二人は乱用させていた。

携帯電話という便利な文明機具があるならそれを使うに越したことはないからだ。

『こっちは人形どもと、偽者の愛彦に足止めを食らったところだ！！』

「こっちも同じだよ」

『一旦、合流しよう。あのバカもそこにいるか？』

「拓海なら……………」

ハッとレヴィは気づいた。

なぜ下川はジェフリーがいる時に傀儡を使って自分達を襲ったのか？そんな真似をすれば、顔見知りのジェフリーに直ぐにばれてしまう。

否、始めからばれるのが目的なんだ。

そうする事で、ジェフリーの性格を知ってる下川なら彼が直ぐにでも自分の元へ来るのがわかっていた。

建物の屋上にしてもそうだ。

今、考えてみれば姿を見せすぎな気もする。まるで、この場所を見つけて欲しいようにも思える。

「初めから、私達を誘き寄せざる為の罠……………」

邪魔な能力者二人を引き離す理由なんて一つしかない。

『狙いは拓海だ！！』

それを聞く前にレヴィは屋上から飛び降りた。空中で粒子を光の羽根に変化させ、一気に下降する。

（私のミスだ）

時速120キロの速さで下降するレヴィの肌を風が切り裂く。

（どうして、拓海を一人にしたの）

能力者同士の戦いは、素人には危険と判断した。

だから、レヴィは拓海を置き去りにした。

その判断自体は間違っていないのかもしれない。

（それでも、そばにいないとけなかった！）

今更、後悔しても遅いかもしれない。それでもレヴィは願った。

少年の無事を。

地面が見えた。

レヴィはスピードを落とし、ゆっくりと降りた。

少年に待っていて、と言った場所。

——そこに待っている筈の少年の姿はなかった。

オートマタ（前書き）

この物語はフィクションです。

オートマタ

どこかのオフィスだろうか。

拓海は全面ガラスばりの窓に目を向けた。

日は落ちており、暗くなった空には星が一つも見えず、漆黒の闇が永遠に続いている。

まさか人生で二度も拉致られる経験をするなんて感慨深いものだ。後ろ手に手錠をハメられているのにも関わらず拓海は余裕綽々だった。

「不思議な方ですね。もう少し取り乱すものかと思っていました」拓海は声の主を見た。

女性だ。年齢は自分よりも年上だろうか。ミディアムヘアの青紫の髪をしている。

（確か、名前はリリイさんだっけ？）

拓海は、このオフィスに連れて来られた時に聞いた彼女の自己紹介を思い出していた。

（にしても、何でメイド服？）

そう。何でか知らないが彼女はメイド服を着用していた。

（下川の趣味か？）

なら、良い趣味をしてる。内緒だが、拓海は心の中で下川愛彦を褒め称えていた。

「敵ながらあっぱれた」

「何がでしょうか？」

「しまったーっ！！心の声がついもれてしまったーっ！！」

「ふふっ……面白い方ですね」

リリイは笑った。その笑顔はどっからどうみても人間の様に見える。

しかし、違った。

自律稼働型機械人形――。

彼女は、オート・マタと呼ばれる存在らしく。

ある程度の自律行動が出来る彼女は、ポットのお湯を紅茶のパックが入ったティーカップに注いだ。

紅茶の香りがこちらの方まで漂ってきた。

紅茶の香りを堪能していると、リリイが紅茶のティーカップを乗せたソーサーを差し出してきた。

まさか、これを飲めというのか？

後ろ手に手錠をハメられてる状態で？

こんな熱々の紅茶を……。

「安心して下さい。私が飲まして差し上げます」

ドキッとした。目の前にいる女性が人形と言えども、その顔はかなりの美人だ。

しかもメイド服を着て、ご奉仕された日には、自分どうにかなちやうよー、と拓海は変なスイッチが入りそうになっていた。

「それでは……えいつ」

「熱ッ！！こぼれてるっ！！こぼれてますよ！！」

そんな甘い幻想は、一瞬にして砕け散った。

後に残ったのは紅茶の熱さと軽い火傷だけだった。

「申し訳ございません。直ぐに服をクリーニングします」

リリイは拓海の上に馬乗りになると、服を脱がし始めた。

「ちよっ！いい！別にいいから！」

「ダメです。早急にクリーニングに出さないとシミになります」

「どうして服を破こうとしてるんですかっ！関ヶ原さんにはわかりませんよ！この状況が！」

メイドさんに服を剥ぎ取られる男子高校生のシニールな図。

その光景を、一人の青年が腹を抱えて見ている。

白いスーツに眼鏡をかけた優男、傀儡使い――下川愛彦だ。

「あははっ。何をしてるんだい、リリイ？」

二人の視線が椅子に座る下川に向けられた。

「……ご主人様」

リリイは服を引き裂こうとした手を止める。

拓海の上から起き上がると、すつと下川の方に歩み寄り、スカートの端をちよつことつまみ上げお辞儀をした。

「おかえりなさいませ」

「うん。ただいま」

下川は椅子から立ち上がり、リリイの頭を軽く撫でた。

「気分はどうだい？ 関ヶ原拓海君」

「最悪だよ。クソたれっ」

けつと悪態をつく拓海。

それを見て、下川は肩を竦めてみせた。

そして、リリイに一言、二言、指示を与えると、彼女をオフィスルームの外に出した。

部屋を出る時、もう一度リリイはお辞儀をした。

「さて、と。ようやく君と二人きりになれたね」

下川は拓海に向かって微笑んだ。

「俺！ そちの趣味ないから！！」

「いや僕もないからね！ それに僕には恋人もいるから」

「死ぬ。リア充が」

「ええ！？ 急にキレ出したよっ！！」

下川に到底理解できない。モテない男の気持ちなんて。

「ちくしょー羨ましすぎるぜ！！ どんな人なんだ？ 可愛いのか？ それとも美人なのか？ 職業は！？ Oし、スチュワーデス、教師、^{エロ}

婦警、コンビニの店員、ナース！！ どれなんだアア！！」

はあはあと鼻息荒く詰め寄って来る——拓海「変態に、下川は本気で引いていた。」

「君は自分がモテないと言ってるが、彼女はどんなんだい？」

「彼女？」

拓海は、きょっととした。

「警察署に一緒に来た女の子だよ」

ああレヴィの事が、と拓海は彼女の顔を思い浮かべた。

「レヴィがどうかしたのか？」

拓海は慎重に聞いた。

「彼女、君に気が合うと思うよ」

「詳しく聞かせろ……！」

「くしゅん……！」

「どうしたレヴィ。風邪か？」

「平気よ。拓海が大変な時に風邪なんて引いてられないもの」

車の助手席に座るレヴィはカーナビを見ながら速答した。

今、現在彼らはジェフリーの愛車であるポルシェに乗って、とある場所に向かっている。

ジェフリーは愛車を走らせながら、移り行く景色を眺めていた。

まだ繁華街に近いと言う事もあり、二十二時過ぎでも街は明るい。カーナビを見てるレヴィの指示に従いながら車を走らせていくと、街の明かりは後方に消えていき、辺りには未開拓のビルが目立つ様になってきた。

この未開拓のビルのどこかに拓海が囚われている。

「レヴィ。どこのビルだ？」

「待って……」

レヴィが見てるカーナビ。

この辺りの地図だろう。建物の場所や道路、裏道などが詳しく表示されてる。

その中でも、一ヶ所だけ、赤い点が点滅している場所があった。

「見つけた。300メートル先、右方向よ」

「了解だ」

ジェフリーはアクセルを強く踏んだ。

ポルシェはうねり声を上げ、ぐんぐんとスピードを上げていく。

（拓海、無事でいて……）

拓海が拐われてから一時間以上が立った。

彼が無事だつと言う保障はない。けれども祈れずにはいられなかった。

そんな彼女に気をつかったのか、ジェフリーは優しい言葉を投げ掛けた。

「心配するな。あのバカは変態だが。悪運だけは強そうだからなぶつきらばうな言い方に、レヴィはくすりと笑った。

「ジェフリーも拓海の事が心配なんだね」

「ち、違うッ！！俺が心配してるのはアクセルコードが敵に渡る事で！あのバカの身の安全など心配してない！」

ジェフリーは、真っ赤な顔で否定するが、レヴィはもう聞いてなかった。

前方から猛スピードでこちらに向かって飛んでくるメイドが見えたからだ。

下川の話を一通り聞いた拓海はデレデレだった。

顔を、にへらっとだらしなく歪ませながら身を擦らせてる男子高
校生の姿は、はっきり言って気持ち悪い。

「そっか、レヴィの奴が俺を……参ったなあ」

下川が言うにはレヴィが拓海を異性として意識してるらしいと言
う事だ。

それを聞いた拓海は終始この通りだ。

これじゃあ埒があかないので、下川は咳払いをして、

「それよりも、拓海君」

当初の話に戻した。

「君はアクセルコードについてどこまで知ってる？」

アクセルコード。能力者の能力を極限にまで引き上げるモノ。

今は少年の心臓の代わりと活動してるソレを、拓海は、そんなに
詳しくは知らなかった。

「僕はね。アクセルコードの力は能力者の能力を上げるだけじゃ
ないと思うんだよ」

「どういう事だ？」

「考えてごらん。アクセルコードが能力者の能力を上げるチート
だつとしたら、どうして白装束の女は……ただの人間である君に渡
したのかな？」

言われて見て、初めて気づいた。

確かにそうかもしれない。アクセルコードが能力者の能力を上げ
る為だけのモノだつとしたら、拓海が持っていても宝の持ち腐れな
んじゃないのか？

なら、どうして白装束の女は拓海の心臓にアクセルコードを埋め

込んだ。

一体なんの目的があつて、少年一人の人生を狂わせたと言ふのだ。

「そこで僕は考えた。アクセルコードの力が能力者の能力を上げる為だけじゃなく。全く別の使い道があつたとしたら？」

下川は眼鏡を光らせた。

影が彼の顔に落ちていき、その表情が変わっていくのが、はつきりと目にとれて見えた。

「別の使い道？」

「その答えは君が一番よく知ってる筈だよ」

下川は拓海の胸を指で突つついた。

「アクセルコードは命を与える」

下川は続けた。

「僕は、死人である君が動いていられるのはアクセルコードの何らかの力だつと推測している」

死人。その言葉が関ヶ原拓海の胸に重くのし掛かる。

「だから僕は考えた。死んだ人間を生き返らせる事が出来るのなら、人形でもそれが出来るんじゃないかってね」

「……馬鹿げてやがる」

「僕はそうは思わない。僕の考えが正しければ、アクセルコードの力で彼女は完全になれる」

「彼女？」

「彼女は、ある程度の自律行動ができるけど、そこに一切の感情がないんだ。ただ僕の命令に従ってるだけ」

拓海はごくりと唾を鳴らした。

「それが僕には堪え切れない。僕は、彼女の笑顔が見たいんだ。彼女の泣いてる顔が見たい。怒ってる時の横顔も困り顔も見たいんだ」

まさか、下川の言つてた恋人つて――

「その彼女つて……誰なんだ？」

饒舌に語っていた下川は、幸悦した眼差しで答えた。

「——リリイだよ」

最早、下川の目には拓海の姿は見えてない。

いや最初から、誰も見えていないんだ。

見えてるのは、あのオートマタだけ。

そして下川は、彼女を完璧な人にするためなら何でもする。

例え、一人の命を奪ってでも。

（くそッ！どうする！！）

一刻も早く、この場から逃げないと、下川に殺されてしまう。拓海は注意深く周りを見回した。

（ここから脱出するには、あのドアから出るしかないか）

だが、ドアに鍵がかけられてる可能性は高い。

しかも今は、両手に手錠をかけられてる状態だ。

借りに鍵がかけられていないとしても、この状態で扉を開けるには時間がかかってしまう。

その僅かな時間が命とりになる。

（くそ——っ。こいつさえ外せれ——ば……——って外れてる

ッ！？）

がちやがちやと手錠をいじっていたら、カチャと簡単に外れた。

（どうなってんだ？だが、これで脱出できる！）

拓海は直ぐに行動に移した。

下川を体当たりで吹き飛ばすと、飛ぶ勢いでドアノブを回した。

——鍵かかってました。

「ちくしょー！！やっぱり鍵がかかってやがる——！」

拓海は、ドアから視線を窓に移した。

壁全体がガラスばりで出来ていて、夜の景色が一望できる。

ここが何階建ての建物で、どの階かわからない以上。窓を割って脱出するのは止めた方がいい。

なのに、拓海は迷わず両腕を盾にして突っ込んだ。

割れたガラスの破片が頬を切り裂いた。赤い血が夜風に乗って流れてゆく。

身体が一瞬滞空し、次の瞬間には真つ逆さまに落ちていく。

パラシュートもなしで建物からダイブするのは、ただの自殺行為だ。

（やけになつたのか？）

下川はそう考えた。

違う。

拓海は見たのだ。

青白い翼を広げ、こちらに飛んでくる女の子を。

拓海は叫ぶ、

[illegible]

彼女の名前を。

「拓海
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
い
! !
」

レヴィⅡノウエルは見事に空中で拓海を掴まえた。

そして、そのまま羽根を羽ばたかせ、この場から離れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5740y/>

アクセルコード

2011年12月2日15時52分発行